

第 9 章 アズマリ、ラリベロッチ: 高原の音楽と踊り 川瀬慈

アズマリとラリベロッチ

エチオピア高原の音楽を語るときに欠かせないのが、先祖から代々唄うことをなりわいとして生きてきたアズマリ、ラリベロッチと呼ばれる二つの職能集団の存在である。

ヤギの皮を張った共鳴胴と馬の尾の弦からなる単弦楽器マシニコのメロディにあわせて唄うアズマリの姿は、エチオピア高原の風物詩ともいえる。北部のゴンダール周辺にはアズマリの村が点在し、演奏する機会に恵まれた場所を他のアズマリから聞きつけ、あるいは親族のコミュニティが存在する都市をめざし、その多くがエチオピア全土へ音楽活動に旅立っていく。アズマリは、結婚式、洗礼式や家屋の新築祝いなどの祝祭儀礼の場や酒場などの娯楽の場で唄うことが良く知られている。そのほかにもアズマリは、エチオピアの国教であるキリスト教・エチオピア正教会の各種行事において伴奏を行うと同時に、エチオピア正教によって邪教に位置づけられる憑依儀礼の場面において演奏を行うこともある。アズマリのパフォーマンスは、非常に多様な社会的状況において要請されており、エチオピア全土に分布するアムハラ人の社会において重要な役割を担っているのである。

ショワ北部、ゴジヤム南部からやってくるラリベロッチと呼ばれる唄い手たちは、早朝に家の軒先において斉唱を行い、人々に祝福の言葉を与え、それに対し、金銭、衣服、食物等を受け取る。ショワ北部では、法要（タスカル:人の死から 40 日後、1~7 年毎におこなわれる）の際にラリベロッチが故人の名誉をたたえる目的の斉唱をおこない、その報酬に牛の大腿部を受け取るのが慣わしである。ラリベロッチは、音楽活動をやめるとハンセン病（ラリベロッチの隠語で“シュカッチ”と呼ばれる）に侵されるという信仰を持ち、ハンセン病への恐れから、先祖代々音楽活動を継承してきた集団である、と人々に信じられてきた。エチオピア音楽史のなかでも当集団をミステリアスな存在として際立たせてきたこの信仰に対しては、実際のところラリベロッチの間でも大きな個人差がある。

アズマリ、ラリベロッチ、どちらの音楽集団も、セムナ・ワルク（蠟と金:歌詞の表面的な意味が蠟のように溶け、金、すなわち唄の中に隠された意味が現れる）に代表されるようなメタファーに溢れた婉曲的な歌詞の表現を得意とする。同時に、両者とも場面对応的で即興性に富んだ唄いまわしによって、聴衆を褒め称えてよい気分させていく。古くからこういった音楽職能集団のなかには、王侯貴族にお抱えの楽師として仕え、唄のなかでパトロン功績や武勇をたたえたり、戦場で戦士を鼓舞するなどして活躍し、貴族しか持たぬような冠位すら与えられる者がいた。特にアズマリは、歌を通して意見を述べるのみならず、聴き手たちの意見も代弁することでよく知られている。ここでの“代弁”の具体的な意味は、アズマリが演奏する場面を観察していると、アズマリ演奏をはじめて目の当たりにする者にでも容易にわかる。聴き手からアズマリへ向かってさかんに即興詩が投げかけら

れ、アズマリはそっくりそのままその詩を反復し、他の聴衆に聴かせるのである。時には聴衆どうしの口論までが、アズマリを介してなされる場合もある。演奏が男女のアズマリによる場合は、主にマシンコ奏者である男性アズマリから詩が投げかけられ、中心的なボーカルを担当する女性アズマリがその詩を繰り返すなど、アズマリ同士でも詩の復唱がなされることがある。フッカラと呼ばれる軍人や男性が行なう、己の強さの自慢や誇示をモチーフとする内容の詩が、聴衆から投げかけられることもある。以上のように、アズマリのパフォーマンスは、アズマリと聴衆による豊かな相互行為の上に成り立っているのである。

ラリベロッチの唄は、2行で1対となる押韻のリズムを規則的に保ちながら展開していく。まず男性が、聴き手に金品を婉曲的に催促する内容の詩を唄いあげると、それに続いて女性が歌詞を持たない一定の旋律を唄い、男性、女性のパートが交互に繰り返され、聴き手に施しをせまっていく。金品や衣服、食べ残しの食物を受け取ったあと、ラリベロッチはそれらを渡した人物に対して「イグザベリ・イスタリン（神があなたに恵みを与えますように）」という特定のフレーズから始まる祝詞を贈る。ラリベロッチはしばしば唄いかける相手に関する情報を近所の住人から聞き出し、歌詞のなかにとりこんでいく。これらの情報には、名前のほかにも、宗教、職業、家族構成等が含まれ、それらは聴き手の気分を持ち上げ、聴き手を施しへとかりたてるのである。ラリベロッチに対する人々の反応は多種多様である。親しみを込めた挨拶を投げかけるものもいれば、「この家の主は、教会へ出かけて留守にしている」「家族が病気で寝ているから黙ってくれ」「最近、祖父が亡くなったの」等、ラリベロッチが唄うのを止めざるをえないような言葉を投げかけ、彼らを追い払うものもいる。

“アズマリ”、“ラリベロッチ”は、実は他称に過ぎず、彼らの社会には、外部者には知らせてはいけない集団内のみで用いられる呼び名が存在する。この呼び名は、音楽家の家系の血を引くものとそうでないものをわけるカテゴリーともとらえられる。例えばアズマリの場合では音楽家の系譜をたどるものは“ンザタ”と自らを称し、その音楽家としての真正さを主張し、同時に、ンザタはこのカテゴリーに属さない全ての人を“ブガ”と呼び区別する。たとえヨーロッパ公演に毎年参加するような有名なアズマリでも、この系譜に属さないものはンザタからはブガと呼ばれ排除される。ラリベロッチも同様に、“ラワジ”と“バルテ”というカテゴリーのもと親族集団とそうでないものを区別している。秘密の集団カテゴリーのみならず、両集団ともに独自の隠語を発達させている点も興味深い。この隠語には、彼らの唄の聴衆が日常使っているアムハラ語の語彙を一定のパターンに基づき変形させた造語が多く見られる。それらは、ほんの少し語彙を変形させるだけの言葉遊びのようなものであるが、聴衆のエチオピア人にもその語が何を意味するのか全く理解できないのである。この隠語を用いて、歌詞と歌詞のあいだを縫うように、両集団の活動に関わる重要な情報が頻繁に交換されるのである。

彼らは現在にいたるまで、モヤテンニャ（職能者）、という範疇のもと、機織、鍛冶屋、

壺作り、皮なめし、などの職人とともに、人々から卑しい職能をもつ人々として、蔑視される傾向にある。そのようななか、近年アズマリのなかから、自作の曲をCDやカセットとしてリリースしたり、ファッション雑誌の表紙を飾ったり、ヨーロッパにおいて公演を行うようなスター歌手もでてきた。なかにはエチオピアン・ディアスポラを多く抱えるワシントンDCなどでマーケットの拡大を狙い、頻りに渡米するアズマリもでてきた。ラリベロッチも、そのコーラスと歌詞がいくつかのポップ・ソングに使用されるにともない、ジャーナリストや学者たちの注目を浴びつつある。地域社会の音楽を担ってきた彼らが、一部では職能者からポップ・カルチャーのアーティストとして人々に受け入れられる過程にあるとも考えられる。独自の音楽文化を育んできたエチオピア高原も押し寄せるグローバル化の波とは無関係ではいられない。そのようななかでも、エチオピア高原の音楽職能集団は持ち前の柔軟性と即興性にあふれたパフォーマンスで、今後もしたたかに生き延びていくであろう。

エチオピアの踊りの都市的展開

エチオピアの首都アジスアベバでは、1991年の社会主義政権崩壊にともなう夜間外出禁止令の解除以降、バハル・ミシエットと呼ばれる伝統音楽を専門とするナイトクラブが増加する傾向にある。バハルミシエットでは、アズマリのパフォーマンスの他にも男女の踊り子たちによる民族舞踊パフォーマンスが見られる。いわば“エチオピア民族の陳列ショー”といったところである。

ウォロのダンスは放牧、水汲みなど農村の生活の静かなドラマから始まり、男女の恋のかけひきをモチーフにしたダンスへとなだれ込んでいく。オロモのダンスでは、ヒヒの毛皮をかぶった勇猛な戦士が登場し、戦場を駆けめぐる馬のステップが模倣される。女性ダンサーによる頭部の激しいスピンのも忘れてはならない。リンガラポップを想起させるリズムにのせて腰をセクシーに振るウォライタのダンス、テフの播種、除草、収穫、脱穀等の農事歴が描かれるミンジャ等、ここでは踊り子たちの民族衣装やダンスの振り付けを通して、エチオピア諸民族の生活風景や時にはその民族の気質までもがカラフルに表象されていく。特にゴッジャムやゴンダールのダンス中は、座って音楽を聴いている聴衆の直接面前に踊り子が立ち、聴衆にあたかも語りかけるように肩と胸をふるわす。そうして、聴衆が立ちあがって踊ることをしきりにうながす。ここで聴衆は、肩をはげしく痙攣させる“イスクスタ”、腰、胸、顎の順に体を波打たせる“デシク（あるいはマンタク”等の動きで踊り手に応戦せねばならないのである。

エチオピアの民族舞踊パフォーマンスはハイレセラシエ帝政期に愛国精神の象徴として建造されたアガル・フッカル劇場に端を発し、社会主義政権の広報係として全国に結成されたキナット楽団を経て、エチオピアの時の政権や政策と歩みをともにしつつ、創造され改変されてきたのである。